

(博士論文概要)

失語のある人の対話者に対する会話パートナー訓練の効果

平成28年度

竹中 啓介

筑波大学大学院人間総合科学研究科

生涯発達科学専攻

1. 本研究の目的

失語のある人（persons with severe aphasia：以下 PWA）との会話は、多くの人にとって困難である。しかし、対話者が PWA のコミュニケーション能力の特徴を理解し適切な会話技術を用いることで、PWA との会話が可能になる。そのような会話技術を PWA と対話する相手の人に身につけていただくアプローチが会話パートナー訓練（conversation partner training：以下 CPT）である。

本論文は、CPT の効果を検討するため、次の 5 つの研究目的を設定し、それぞれについて実証的研究を行った。すなわち、①講義形式とロールプレイによる CPT の効果について会話分析を用いて情報伝達の観点から検討する、②PWA から正確な情報を引き出すために有効な会話技術の種類と運用方法について検討する、③対話者の会話態度と会話技術を観察により評定する評価尺度を開発する、④講義形式とロールプレイによる CPT の効果を開発した評価尺度を用いて無作為化比較試験で検討する、⑤CPT の効果のなかった対話者を対象にビデオフィードバックを含むフォローアップ訓練を行い、その効果を検討する、の 5 つである。

2. CPT の研究動向と問題の所在

CPT の効果を検討した 54 件の文献を分析した結果、5 つの問題が明確になった。第 1 に、第三者を治療介入の対象とした講義形式とロールプレイによる CPT は、対話者の会話態度と会話技術を向上させ、PWA の会話への参加を促進することに有効性が示されたが、情報伝達の観点からは検討が不十分であった。第 2 に、対話者が行う会話技術が PWA の正しい反応を引き出すためにどの程度有効であるのかについては明らかでなかった。第 3 に、CPT の効果を測定する観察評価尺度にはいくつかの問題があり、新たな尺度を開発する必要があった。第 4 に、無作為化比較試験により CPT の効果を検討した研究は、2 件のみであり、本邦においては皆無であった。第 5 に、CPT の効果が不十分な対話者が存在すると考えられるが、そのような対象者に焦点を当てた先行研究はなかった。

3. 実証的検討

第 1-1 研究では、対話者に CPT を行い、重度の PWA との会話における情報伝達実験（以下伝達実験）のパラダイムを用いてその効果を検討した。手続きは、

動画の基本語を抽出する予備実験と、対話者が会話技術を用いて PWA からどの程度の情報を引き出すことができるかを検討するための 5 回の伝達実験、および CPT の実施から構成された。伝達実験は、PWA 8 名と対話者 8 名を対象に 8 組のペアを構成し、PWA が見た動画の内容を対話者が聞き取る形式で 5 回行った。伝達実験 1・2 の後、全対話者に対し CPT を実施した。その後行った伝達実験 3 は CPT の効果を検討するために伝達実験 1・2 と同じペアで行った。さらに伝達実験 4 は、ペア同士の慣れの効果を検討するために各ペアの組み合わせを入れ替えて行った。最後に伝達実験 5 は、CPT の効果の持続を検討するために CPT の約 2~3 週間後に伝達実験 1~3 と同じペアで行った。全ての実験場面の会話映像は、録画機と録音機で記録した。データは会話分析を用いて文字化し、会話のなかに現れた基本語や会話技術等をコーディング（特定の記号を付けること）した。また、各伝達実験で観察された基本語数をもとに情報伝達率（以下伝達率）を算出した。情報伝達率とは、対話者が PWA から聞き出した基本語の合計を予備実験で得られた基本語数で除し 100 を乗じて求めたものである。これらをもとに CPT 前後における伝達率と会話技術の出現頻度の変化について分析した。その結果、CPT 後では CPT 前と比べて伝達率、筆記および選択質問の会話技術の使用が増加し、WH 質問が減少した。これらは相手が異なっても同様であり、約 2~3 週間後も効果が持続していた。

第 1-2 研究では、第 1-1 研究で得られたデータのうち、伝達率の高い会話 8 データと伝達率の低い会話 8 データを抽出し、観察された会話技術の使用度数と PWA の応答の正確さを両会話群で比較した。その結果、高伝達率会話群は低伝達率会話群よりも、紙面に視覚的情報を提示する描画および選択質問と、PWA の理解および表出の内容を確認する会話技術を多く使用していた。また会話技術使用直後における PWA の応答の正答数は高伝達率会話群で多く、誤答数は低伝達率会話群で多いことが示された。

第 2 研究では、対話者の会話態度と会話技術を評定する観察評価尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。方法は、経験豊富な言語聴覚士 3 名が評定に必要な内容をブレインストーミングで列挙した後、他の言語聴覚士 2 名が KJ 法に準じて概念化し、尺度の項目を作成した。信頼性と妥当性の検討のため、他の 3 名の言語聴覚士が 2 種の会話映像、すなわち失語のある人 8 名と対話者 8 名がペアとなり情報を伝達する会話映像と、失語のある人 3 名と対話者 10 名がペア

となり自由に話す会話映像について評定を5件法で行った。尺度得点の評定者間および評定者内信頼性および、会話における情報伝達率とPWAの対話者に対する話しやすさの印象を外的基準として基準関連妥当性を検討した。観察評価尺度得点の評定者間および評定者内信頼性は高く、尺度得点と外的基準との間に有意な相関を認めた。これらの結果から、本尺度は信頼性と一定の妥当性を備えると考えられた。

第3研究では、講義とロールプレイによる対話者へのCPTの効果について第3研究で開発した観察評価尺度を用いて無作為化比較試験による検討を行った。対話者は無作為に介入群30名と統制群30名に割り当てられた。介入群と統制群は1回目の評価として、PWAと1対1でペアになり、約15分間の自由会話をを行った。介入群は、1回目評価の後、約2~3週間後に2時間×2回のCPTを受けた。統制群はCPTを受ける前に2回目の評価を1回目と同じ方法で行った。介入群はCPTの約1~2週間後に2回目の評価を1回目と同じ方法で行った。会話映像は全て録画し、言語聴覚士1名が観察評価尺度を用いて5件法で評価した。会話態度と会話技術の観察評価尺度得点について、介入群・統制群の得点の変化を分析した結果、介入群2回目の会話態度および会話技術の観察評価尺度得点は、介入群1回目、統制群1回目、統制群2回目の観察評価尺度得点よりも有意に向上した。以上のことから、CPTは、対話者の会話態度および会話技術を向上させることが明らかになった。

第4研究では、講義とロールプレイによるCPTで効果の認められなかった9名の対話者を対象に自らの会話態度と会話技術の運用を認識させるためのビデオフィードバックによるフォローアップ訓練を行い、その効果を検討した。対話者はPWAと1対1でペアになり、約15分間、1回目の自由会話をを行った。会話場面は全て録画した。終了後、対話者に自らの会話を振り返り、観察評価尺度の項目に対応した自己チェックシートに5件法で1回目の自己評定を求めた。また、評定者1名に会話映像を提示し観察評価尺度による5件法での他者評定を求めた。次に対話者は個別に1時間のフォローアップ訓練を1回受けた。フォローアップ訓練は、対話者に自身の自由会話映像を提示し、筆者が対話者の会話態度および会話技術について、十分もしくは不十分な箇所を指摘した。不十分な個所については、どのように改善するべきかを話し合った。訓練終了後、対話者は1回目の自由会話と同じPWAと自由会話をを行った。終了後、1回と同じ方法で2回

目の自己チェックシートへの回答を求めた。また、言語聴覚士 1 名に 2 回目の会話映像を提示し観察評価尺度による 5 件法での他者評定を求めた。分析は、第 1 にフォローアップ前後の他者評定の平均値の差について検討を行った。第 2 に、他者評定から自己評定を減じた数値を自己認識得点として算出し、他者評定との関連を検討した。その結果、9 名中 7 名の対話者は、他者評定による観察評価尺度得点が 1 回目よりも 2 回目で向上した。また、2 回目の他者評定の結果が平均値以上であった 5 名は、自己認識得点が負の値、すなわち他者評定よりも自己評定が低くなる傾向が認められた。一方、2 回目の他者評定の結果が平均値未満であった 4 名は、自己評価得点がゼロに近づく傾向、すなわち、他者評定と自己評定が等しくなる傾向を示した。以上のことから、ビデオフィードバックを含むフォローアップ訓練は、会話態度および会話技術を向上させる効果があると考えられた。しかし、自己認識の向上には寄与せず、むしろ自己評定が厳しくなった対話者の方が、自己認識を正確にできる者よりも会話態度および会話技術を向上させる傾向が認められた。

4. 結論

以上より、次の 5 つの結論が得られた。すなわち、(1) 講義形式とロールプレイによる CPT は、PWA との情報伝達実験会話における情報伝達率の向上、対話者の会話技術の使用の増加、WH 質問方法の減少、失語に関する知識の向上に効果を認めた。(2) PWA から正確な情報を引き出すには、話しながら描画や文字の情報を紙面に記すこと、PWA の理解や表出を確認する会話技術を使用することが有効であった。(3) 対話者の会話態度および会話技術を評定するために作成した観察評価尺度は、信頼性と一定の妥当性を備えていると考えられた。

(4) 無作為化比較試験による CPT は、観察評価尺度で測定しうる対話者の会話態度および会話技術を改善させることが明らかになった。(5) ビデオフィードバックを含むフォローアップ訓練は、自己認識の向上を図ることはできないが対話者の会話態度および会話技術の改善に有効であった。